

拡大物性委員会（インフォーマルミーティング） 議事録

2016年 3月 20日 17:30-19:30

日本物理学会 71 回年会 東北学院大学（泉キャンパス）BL 会場

出席者（敬称略）：計 54 名

配付資料

1. 物性研報告書
2. 京大基研
3. J-PARC
4. KEK

議事次第

1. 委員長挨拶
2. 事務局報告
3. 各共同利用研究所からの報告
4. 話題「領域問題のこれまでの経緯と現在の問題点」（神大理 播磨尚朝先生）
5. その他

議事

17:30

開会の挨拶（木村）

1. 委員長挨拶（清水）

- ・事務局は物性グループの意見を集約し、外に出せるよう機能したい。

2. 事務局報告（清水）

- ・新しい HP ([bussei-group.org](http://bussei-group.org)) の紹介
- ・組織のおさらい、連絡ルートの説明
- ・会費半額措置解除、現在の会費の期限(2017.3 まで)、振込料会員負担の確認
- ・電子ジャーナル問題の報告（パリティー記事の紹介）
- ・拡大物性委員会開催日についての説明（年会 2 日目、分科会 1 日目）
- ・H27 年 9 月までについての会計報告（監査：豊田理研 西田信彦先生より問題なしの説明）
- ・この半年の会計報告
- ・APCTP 日本委員会委員の推薦

- ・新たな監査役の報告

上記の件、拍手にて出席先生から承認

### 3. 各共同利用研究所からの報告

瀧川仁（東大物性研所長）

- ・共同利用・共同研究拠点の期末評価と次期認定

2013.9 中間評価（S）だった 期末評価（S）2015.9

次期認定

阪大強磁場との連携（コラボラトリー計画）、先端装置等の共同研究者への提供が評価  
先導性が課題とされた

パルス強磁場コラボラトリー：H28 より共同利用（共通のプラットフォーム、旅費等）

- ・国際外部評価 2016.1.21-22

“extremely impressive facilities”

“highly productive external user program”

SCES 分野への高い評価

研究所全体の cohesion を高めるための計画を endorse

機能物性研究グループ・量子物質研究グループの新設

- ・大型施設計画・大規模研究計画に関するマスタープラン

マスタープラン 2014 の改訂(2017 より、3/31 締切)

2016.3.11 物一分野の公開シンポジウム

物性研関係 強磁場、極限コヒーレント光源、物性科学連携研究体（前回は理研が提案、  
今度は分子研（新所長：川合真紀先生）が提案、金研・化研も含めた 5 研究所の連携：人  
材育成に大学の人も関わられるように）

マスタープラン→ロードマップ→概算要求（なかなか通らないのが現状）

コヒーレント光源：産業用ハイパワーレーザー（軟 X 線光源としても注目）

質疑：Q 木村先生：若手とはどういう人を想定しているのか

A：例えば地方大学におられる先生を長期的に研究できるような（クロアボも含め）しくみを  
通じてできればと検討

京大基礎研 早川所長

- ・重力物理センター発足
- ・エンタングルメントをキーワードとした特定教員（物性分野）の公募をもうすぐ開始
- ・詳細は資料を見て欲しい

### 4. 話題提供：「領域問題」（神大理 播磨尚朝先生、JPS 67,68 期理事、物性委員会幹事） 18:09

—

- ・物性委員会幹事会で任期の早い段階から議論するとよいのでは、という趣旨もある
- ・領域問題のきっかけ：番号だけでは「何やっているか分かりにくく数字の内側にこもる傾向」  
→結局番号と略称の併記になっているのが現状
- ・領域の導入は1999年9月の岩手大（秋の分科会）より、もともと分科会を領域制で年会は「当時の従来通りの分科」という話だったが、2000年には方式を変えながら運営するのが煩雑なので年会も領域制で行うことになった。
- ・研究の進展に柔軟に対応できるように、というのがそもそも領域制導入の理由→10年以上たったら今度は「何やっているか分からない（番号だけなので）」となったのが現状
- ・そもそもの番号のみとしたきっかけ：名前をつけないことで分科の固定化を防ぐため
- ・2001.7「ビーム物理分科」の試行（3年間）
- ・2002.7「物理と社会」領域の設置 分科の世話人→領域世話人
- ・2005.3 素核宇の分科も領域にスライドする形で領域制移行
- ・現在の若手奨励賞などは領域ごと

問題点はあるか？

- ・実質的には分野が固定化し、そもそもの設置の主旨と大きくかけ離れているのでは？
- ・領域が若手奨励賞や論文賞の推薦母体となり有効に機能（問題点ではない）
- ・分野間の新たな壁を作る事になっていないか？（播磨先生ご意見）
- ・プログラム編成に問題はないか？（播磨先生ご意見）
- ・これを物性委員会で考えるメリット：3年の任期、領域の利害から離れた議論の可能性

例えば以下のようなことは可能か？

- ・プログラム編成のみ行う「準領域」の設定：運営委員をどう選ぶか？

質疑：Q 福山秀敏先生（領域制導入時の当事者）：「領域を導入すべき」という議論が生じたときと同じことが起こっていると考える。分科会の当時は様々な分科があり、利益代表・グループ同士の衝突や分科間の交流に障害となっていた。それが今度は領域単位で同じことが起こっているのではないか？元々領域制出発のときに所属する分科や領域の境界はテンポラリーで2、3年後に見直すはずだった。物性としてはもともと全体で議論して決めるという仕組みにした。しかし各領域が結局は昔の分科のように利益代表になってしまっているのではないか？最初に領域制導入のときの理念を思い起こすべき。

A 播磨先生：昔の複数の分科から出て領域を構成している。10年経ってやっと落ち着いたという領域もあるので再編は難しいという感触

Q 福山秀敏先生：なぜ現状になったのか？

A 播磨先生：例えば若手奨励賞が領域からで、数が領域の講演数で決まる等のことがあった

Q 福山秀敏先生：いつそういうことを決めたのか？

A 早川先生：若手奨励賞導入時の責任者だが、規模や実現可能性で領域毎

福山秀敏先生：大変残念

野尻先生（東北大金研）：変えると決めても変える方針を決めていなければ変わる訳がない

福山先生：具体的な提案はした。2、3年後に見直すとのことで。

野尻先生：しかし具体的な仕掛けがなければ動かない

播磨先生：昔の複数の分科から出て領域を構成していた。しかし分科がなくなったので領域が固定化されたと思う。

福山先生：その通りだと思う

播磨先生：領域制導入の「赤紙」を探すのは大変だった。「煩雑」が理由なのは分かるが、現在は固定化されている領域を変えることを検討すべきでは？

倉本先生：プログラム編成にリーダーシップが必要で時間を要するのではないか。また、高い透明性も必要。領域制は制度設計として今ひとつなところがあったのは否めないが、今更領域をご破算にするのも困難。サイエンティフィックな審査ができる仕組みが必要では？

播磨先生：領域にまたがる「合同」も文句がなければ合意されるので、実際には領域ごとに色々決めているのが実状

倉本先生：プログラム編成は若い人が中心だが、他領域を見渡す視点も必要ではないか？ 制度は導入しても易きに流れ形式的になってしまうもの

福山先生：プログラム委員会できちんと議論すべきではないのか？

播磨先生：実際には議論する時間はとてもない

遠山先生：領域8代表をしているが、形式的にはプログラム委員会で福山先生が指摘することが可能な状態になっている

藤井先生：形式はととのっているが、なかなか時間がとれず意見を出しにくいところがある。各領域で事前に練っていただければ良いものが出てくるはず。よって、具体的にどういう形で行えばよいのか、という問題ではないか？

播磨先生：シンポ・招待講演や一般講演は別に考えてもよいかもしれない

早川先生：合同セッションについて。やはり易きに流れるものがある。また合同セッションは運営委員に歓迎されない（面倒になるので）が、そこは領域代表が頑張るべきところ。

石田先生（京大理）：「領域の問題」と「プログラム編成」は分けて考えるべき

領域：分科の集合となっている領域とそうでない領域がある。領域6は講演数が減っている。ボトムアップでは分科再編・領域再編が難しいのでは？

大原先生（名工大）：領域のフレキシビリティ担保には領域提案といった新しい提案を受け付けるべきでは？ある領域をつぶすのは難しい

木村先生：領域代表も多く出席されているのでここで議論するのは意味がある

播磨先生：領域会議で議論してもまとまらないだろう。

福山先生：次回の拡大物性委員会で全領域代表に出席いただいて領域代表から問題を議論していただくのはどうか？

清水先生：継続して拡大物性委員会でこの問題は議論を進めていく、でよいか？

播磨先生：私も手伝うつもり。

## 5. その他

特になし

終了